

徳島大学のオンライン英語授業におけるアクティブ・ラーニングの実践例と考察

内山 八郎、 モートン 常慈
(徳島大学 教養教育院)

1. はじめに

教育現場においてアクティブ・ラーニング (AL) の重要性が認知されるようになって久しい。今日までに多くの教育者が自らの授業に AL を導入し、多くの研究者が AL の効果に関する調査を行ってきた。例えば、イリノイ大学の Michael は 2006 年に生理学分野における AL の効果検証を行い、その有効性の存在について言明している¹⁾。更に米国では AL は「エビデンスに基づく教育方法」として推進されている²⁾。本学においても南川による科学技術分野での導入³⁾や塩川による教育改革の一環としての調査⁴⁾を始め、様々な取り組みが行われてきた。

2020 年に起こった新型コロナウイルス感染拡大への対応から、Zoom 等を用いたオンライン授業が急速に普及し、授業の在り方を考え直すことになったのは記憶に新しい。このパンデミックの影響が続く今日、本調査では徳島大学で行われているオンライン授業における AL 実践例を紹介し、アンケート調査に基づく受講生の意見を振り返る。学生の意見を基に AL 導入授業の有効性を検討し、今後の発展の為に総合的な考察を行う。

2. 実践例の概要

2021 年度の前期に教養教育課程の一環として行った英語科目の授業から 2 例を紹介する。いずれも Zoom による同期型のオンライン授業で、受講生による英語の発表を採り入れた例である。実践例 A は英語を母語とする教員による授業で、受講生に 1 名の留学生が含まれる。実践例 B は日本語を母語とする教員の授業である。いずれの授業においても受講生は可能な限りカメラをオン

にして授業に参加するよう促された。

2.1 実践例 A

実践例 A は理工学部電気電子システムコースの 2 年生 27 名からなる発信型英語のクラスである。発信型英語クラスはコミュニケーション力を高める事に焦点をあてたクラスであるため、受講生には学期中に 2 回の発表の機会が与えられた。一回目の発表は前期の第 5 週に始まり、第 2 回の発表は第 10 週に始まった。一回の発表時間は 3 分間とした。発表するトピックは使用教科書「How much do you agree?」⁵⁾で扱っているものとした。この教科書ではそれぞれの章が、海外留学を大学卒業要件にすべきである、大学生は一人暮らしすべきである、などの意見を問うテーマを扱っている。発表者はこれらのテーマから選択し、発表を行った。多くの受講生が真剣に発表に取り組んだ。

評価に於いては、声 (声量と明瞭度)、内容 (構成と興味深さ)、発表技術 (熱意と聴衆の関心の維持など) といったルーブリックに準ずる項目が用いられた。また、受講生は、その週に聴いた発表について (1) 発表者名 (2) トピック (3) 発表者が発言したことを 2 点 (4) 発表者への質問という項目を記述し教員に提出した。また、その週に最も良かった発表の投票を行い、その理由についても担当教員に提出した。

2.2 実践例 B

実践例 B は総合科学部の 1 年生 45 名を対象とした基盤英語クラスである。基盤英語クラスではこれまでに身につけた英語力を更に洗練させることを目標の一つとしている為、大学入学前には

あまり機会の無かったクラスメートとの英語での交流なども取り入れた。

学期末に、学生はそれぞれ約3分間に及ぶ英語による発表を行った。トピックは(1) 今日までに学習した科目の中で最も良かったものと、その理由、及びその授業から何を学んだかについて説明する(2) 自分の人生にとって最も重要なものは何か、また何故それが重要なのか、そしてそれがどのような恩恵をもたらしたのかについて説明する、という2つの選択肢から受講生が任意に選択した。パワーポイントの利用は必須としなかったが、多くの学生が発表の際に活用した。受講生は発表内容やパワーポイントの準備なども含め、約3週間に渡る授業外での準備期間が与えられた。多数の学生が意欲的かつ積極的に発表しているのが印象的であった。

発表の評価は(1) 理解のし易さ(2) 有効な時間の活用(3) 説得力(4) 徹底した準備、という4つの項目をそれぞれ5段階で評価するルーブリックに準ずる基準を用いて行った。また、学生はクラスメートの発表を聴いた感想をManabaによってレポートという形で教員に提出し、クラスメートの発表を積極的に聴き意見を述べる事も成績評価の対象となった。

3. 学生のALへの評価

上記2つの実践例は異なる教員による異なる受講生を対象とした、異なる種類の英語クラスで実施した例であるが、学期末に行った受講生への授業評価アンケートでは共通する点が非常に多く見られた。例えば、「要点の理解に配慮した授業でしたか」という問いに、いずれのクラスにおいても95パーセント以上の受講生が「そうである」または「どちらかと言うとそうである」を選んでいった。また「授業の進め方や教材の選択、自学自習の促進などの点で教員の工夫がありましたか」という問いにも90パーセント以上の受講生が「そうである」又は「どちらかと言うとそうである」を選択していた。更に「授業で得られた知識や考え方は、今後も自分にとって役に立つか、

または有意義だと思いますか」及び「受講者からの発言や質問、積極的関与が促されましたか」という問いにおいては、いずれも92パーセント以上の受講生が「そうである」または「どちらかと言うとそうである」を選択していた。これらの共通点から、いずれの授業においても教員がALの導入によって受講生の積極的な授業への参加を促したことが、一定の効果に貢献していると考えられた。

受講生による自由記述の感想欄では、大学入学以前の英語の授業と異なり、受講生自らが英語を使う機会が多かった事を評価する旨のコメントが多く見られた。その一方で、インターネット接続状況の改善を望む旨のコメントが少数ながら見受けられた。これから期待されるインターネットの接続に伴う技術的な進歩とともに、オンラインでのALも質が向上し、受講生の学びを容易にするものとなるよう、教員と学生が相互に切磋琢磨し、創意工夫を凝らすことが重要であると認識した。

参考文献

1. Michael, Joel, (2006) Where's the evidence that active learning works? *Advanced Physiological Education, The American Physiological Society*, 30, pp. 159-167.
2. 西岡加名恵、(2017) 日米におけるアクティブ・ラーニング論の成立と展開、*教育学研究*、84(3)、pp.25-33.
3. 南川慶二、(2019) プラスチック環境問題を共通テーマとする多面的アクティブ・ラーニング授業の試行、令和元年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集、pp. 22-23.
4. 塩川奈々美、(2019) アクティブ・ラーニング普及を目指した教育改革とその成果 全学初年次教育「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」を通じて、令和元年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集、pp. 34-35.
5. 小林敏彦、Bouchard, Jeremie、(2019) How much do you agree? *Evolving Opinions*、三修社.